

靈根

熱病第二十三

病起とは身病りてけいふか、病なり。言は變文に言す。  
 志を亂れず。病は少陰の間たり。巨脈にてこれを取ら  
 ざる不足を益し。その有餘を損へば、乃ち復す可き也。  
 癉の病を為すや、身に病々無く、四肢收り、智を亂  
 も甚しきなり。この言、微のにも知れは、逆す可なり。  
 喜しければ則ち言ふ能はず。逆す可きなり也。病先ず陽に  
 起り、後に陰に入らば、先ずその陽を取ら、後にその陰を  
 取らば、浮かせ、之を取らばなり。

二十三一一

熱病一と、三日にて氣は靜なり、人仰臥なる者は、心  
 と太陽に取らば、平九刺一と、以てその熱を寫し、その汗を  
 出せ。その陰を實にし、以てその不足を補へ。

身熱甚しく陰陽皆靜なる者は、刺す可い。その  
 刺す可きなる者は、急ぎこれを取ら、汗出せざれば、則ち  
 泄らせ。所謂、勿刺の者は、死徴有る也。

熱病一と、七日八日に、脈は動なり、端にて、短くは、  
 急ぎこれを取ら、汗し、且つ自ら出せ。午の、大指肉を  
 球刺せよ

熱と病んで、七日八日に、脈微小の病める者、澁血あり、

口中乾くは一日半に<sup>一</sup>と死す。脈代は<sup>二</sup>日に<sup>一</sup>と死す。  
熱を病んで、已に汗出づるを得山とて、脈尚ほ躁端に  
<sup>一</sup>と、且つ復熱するは、刺と膚(膚)なるを<sup>二</sup>句<sup>一</sup>也。喘  
甚し者は死す。

熱病<sup>一</sup>と七日八日に<sup>一</sup>と脈躁なるは、散はらざるは、<sup>二</sup>數<sup>一</sup>の<sup>二</sup>後<sup>一</sup>  
三日中に汗有らん。三日に<sup>一</sup>と汗せざらば、四日に<sup>一</sup>と死す。  
未<sup>二</sup>に汗<sup>一</sup>に會わざらば、<sup>三</sup>膚<sup>二</sup>之<sup>一</sup>刺す<sup>三</sup>句<sup>一</sup>也。

熱病<sup>一</sup>と先<sup>二</sup>に<sup>一</sup>皮膚を病み、鼻窒あり、面充つる者は、  
之<sup>二</sup>と<sup>一</sup>皮に第一鍼を以て五十丸に取れ。  
鼻に可<sup>二</sup>刺<sup>一</sup>するは、皮<sup>二</sup>と<sup>一</sup>肝に刺れ、得<sup>二</sup>ざらば<sup>一</sup>、之<sup>二</sup>と<sup>一</sup>火に刺れよ。

二十三十一三

火は心なり。

熱病<sup>一</sup>と先<sup>二</sup>に<sup>一</sup>身、濇<sup>二</sup>有り<sup>一</sup>と、(而<sup>二</sup>熱<sup>一</sup>)、煩<sup>二</sup>悞<sup>一</sup>、膚<sup>二</sup>は<sup>一</sup>、  
燥<sup>二</sup>乾<sup>一</sup>くは、之<sup>二</sup>と<sup>一</sup>皮に第一鍼を以て五十丸に取れ。

膚<sup>二</sup>脹<sup>一</sup>り、は乾き、寒<sup>二</sup>之<sup>一</sup>に汗出づるは脈を心に刺れ、  
得<sup>二</sup>ざらば<sup>一</sup>、之<sup>二</sup>と<sup>一</sup>水に刺れ、水は腎なり。

目<sup>二</sup>背<sup>一</sup>青きは肉を脾に刺れ、得<sup>二</sup>ざらば<sup>一</sup>、之<sup>二</sup>と<sup>一</sup>木に刺れ、  
木は肝なり。

熱病<sup>一</sup>と面青く、脳病み、手足躁なるは、之<sup>二</sup>と<sup>一</sup>助<sup>二</sup>間<sup>一</sup>に  
第四鍼を以て、回<sup>二</sup>逆<sup>一</sup>に取れ。

筋<sup>二</sup>癢<sup>一</sup>し、目<sup>二</sup>涙<sup>一</sup>するは、肝<sup>二</sup>を<sup>一</sup>肝に刺れ、得<sup>二</sup>ざらば<sup>一</sup>、之<sup>二</sup>と<sup>一</sup>金に

索めよ 金は肺なり。

熱病一之熱おしは驚き、癩瘰と狂おは之を脈に第四鉄を以て  
取水。志が有餘を寫せ、瘰疾一之毛髮去るは、血を心に索めよ  
得るは之を水に索めよ、水は腎なり。

熱病一之身重く背痛め、耳聾一之、好く睡るは、之を背に第四  
鉄を以つて五十九刺と取れ。背を病んで食はす、起齒齒一、耳青  
之は腎、腎に索めよ、得るは之を土に索めよ、土は脾なり。

熱病一之痢し所を知らず、耳聾一、自ら收む能はず、口乾く  
陽熱甚しく、陰に隨る者有る者は、熱髓に在り。死して、治す  
可からざるなり。

二十三、一五

そりび 眩空穴

ほらて

熱病一之頭痛あり、可爾頭、目、瘰脈一、痛め、善おしは、鉗するは  
厥熱病なり。之を第三鉄を以つて取れ、有餘、不足、寒熱と  
視よ。

熱病一之體重く、腸中熱するは、之を第四鉄を以て、輸及下の  
諸指同に取れ。氣を胃の絡に索め、氣を得る也。

熱病一之痛膈を挟み之を痛し、胸背滿つるは、之を湧糸と陰  
陵糸とに取れ、第四鉄を以て取り、陰の裏に鐵せよ

熱病一之汗し、且汗に出るんとし、及んで小便なりく、汗す可き者は、  
之を品際、大淵、大府、大白に取水。之を寫せば、則ち熱去り、

之を補ふ則ち汗出ず。汗出づる大いに甚きは、内踝上の  
極脈を取り、以て之を止む。

熱病一已に汗を得て、脈尚ほ躁、盛はるは、此の陰脈の極み也。死す。もし汗を得て、脈静かば、生く。  
熱と病人の脈尚ほ盛、躁にして汗を得ざる者は、此の陽脈の極み也。死す。脈盛、躁らば、汗を得、静かば、生く。  
者は生く。

熱病の刺す可い者なり。

- 一に曰く、汗出ず、大體發赤し、熾する者は死す。
- 二に曰く、泄して腹滿甚しき者は死す。
- 三に曰く、目明らば、熱已まざる者は死す。
- 四に曰く、老人、嬰兒の熱ありて、腹滿する者は死す。

二十三 一七

- 五に曰く、汗出ず、嘔え、下迫する者は死す。
- 六に曰く、舌本爛れ、熱已まざる者は死す。
- 七に曰く、欬し、汗出ず、出づるも足るに至らざる者は死す。
- 八に曰く、體熱する者は死す。
- 九に曰く、熱ありて、瘧する者は死す。腰折、癰癤、に齒際、に斷る。凡そ、ふれ者は、刺す可い者也。

所謂、五十九刺とは、兩平の内、外側、各三つにして、此の十二痛、五指間、各一、凡そ八痛、足も、是の如し。頭の入、鬢する、一寸の傍らに三つ、各三つ、凡そ六痛、更に入、鬢する、一寸の傍らに五つ、凡そ十痛、耳の前後、口の下に各一、項中に一、凡そ六痛。お題上に一、

頭総一、髮際に一、康泉一、風池二、天柱二なり。

氣、胸中に滿ち、喘息するは、足の太陰の太指の端、爪甲を去ると、  
蕤葉の如きを取らば、寒ければ則ち之を留め、熱ければ則ち之を疾く  
す。氣下れば乃ち止めよ。心、孤景を翳するは、足の太陰、厥陰を  
取らば、思ひく利く其の血絡を去り、喉痺して舌を去るは、中乾す、  
煩心し、心痲し、臂の内廉痛みて、頭に及ぶ可からざれば、少指の  
次指の爪甲の下、去ると、蕤葉の如きを取らば、目中赤く、内腎の如き  
従り、痲みは、之を陰矯を取らば、風痺し、身の反折するは、後不足の  
太陽及び國中及び血絡を取らば、血を去す。中に毒有らば、  
三皇を取らば、瘡は之を陰矯、及び三毛の上、及び血絡に取らば、

二十三、九

血を去す。ハア子は虫蠶の如く、女子は阻ソ（阻ソ）の如く、身體、浮脊  
解くよ、如くなり、飲食を欲せざれば、先ず湯泉を取らば、  
血を見ず。跡上を視て、感るれば、思ひく血を見せ。